



ロータリー2510地区月例報告 Vol.7

4月は入学の春。新たな出会いが待っている季節には桜がつきものだと思っていた高校時代の自分。東京の実家の近くには数キロに渡るソメイヨシノが川沿いに植えられており、桜のトンネルの中を気持ちよくランニングしていたものだ。しかし、初めての北海道大学での入学式では桜どころか若緑の萌芽さえほとんど見なかった。代わりに枯れ木が目立っており、強い戸惑いを覚えた。そんな日本の代名詞と言っても過言ではない桜だが、ロンドンの家の近くでも桜があった。ピンク色の花卉が見えたので近づき木の幹をじっくり眺めてみたら、やっぱり桜だった。調べてみると僕が住んでいるCrouch Endという地域で桜は少し有名なようだ。近所のAlexandra Palaceも桜の名所だった。桜は好きなので嬉しいサプライズだ。



写真1. Alexandra Palaceでの桜

3月は振り返ってみると色々慌ただしく課題や書類の準備をしたけれども、結局なにをやったかイマイチ判然としなかった月だった。充実していたのでしょう。思いがけないことに、来年度のLSHTM修士の入学者の人が僕に連絡をくれた。僕は個人でブログを運営しているのだが、その中に海外大学院留学に関する記事を5つほど書いていた。LSHTMに留学している旨は明確には書いてないのだが、LSHTMの画像を使っている箇所があったので、そこを契機に連絡をしてくれたのだと思っている。次年度の修士の学生が決まり、本格的に留学準備を始める時期になったのかと少し感慨深い気持ちになった。その人もロータリーから奨学金をもらっており縁を感じた。

今までの報告書で一度も触れてこなかったが、ロータリー奨学金が海外大学院留学を志すものにとって大きな役割を果たしていることについて述べておきたい。まず世界的なトレンドとして大学院の学費は2極化している。英国と米国は年々学費がうなぎのぼりの状態。僕の入学年度ではLSHTMの修士の授業料は約440万円だった。更に悪いことに毎年20万円ずつ学費が上昇してきている。次年度2023/2024の学費を確認したら

2022/2023と比較して30万円値上がりしていた。一方、米国・英国以外の国では大学院の授業料の無料化や授業料・生活費と同等の給料を支給する方向に向かっている。日本も修士・博士課程の学生に生活費相当の支援を拡充してきている状態だ。海外留学をしたいと思った時の奨学金について確認してみる。日本学生支援機構の海外留学支援制度の支援額を見てみると、生活費は月額14万8000円、授業料は年度250万円を上限としている。民間の他の大規模奨学金でも生活費は20万円、授業料に関しては最大300万円としているところが多い。どちらにせよ、英国、米国に留学したければお金が足りない状態になってきている。実際、英国のロンドンに居る2022/2023年度の修士のグループを作成しているが、現在18名いて半分以上がロータリーからの奨学金を得ていた。もちろん、ロータリーの人同士はグループに誘いやすかったことは一因であると思うが、他の奨学金では英国を留学先として選べない人が多かったのではないかと考える。

米国・英国留学がいつも最善であるとは限らないが、少なくとも公衆衛生領域でのトップ大学院は米国と英国に集中している。そのため、このロータリーの奨学金が日本の公衆衛生分野での人材投資の側面で大きな役割を果たしていることは間違いないと考える。僕自身もその恩恵にあずかることが出来て大変感謝している。ロータリーは更に支援を拡充しているようで、数年前にはグローバル奨学金をやっていた地区から、ここ数年、グローバル奨学金を始めた地区の話をして2箇所聞いている。残念ながら、まず間違いなく今後更に海外大学院での学費、生活費の負担が増えていくが、他の奨学金ではかなり不足する状態になってきている。米国・英国留学を目指す人の大きな拠り所の一つがロータリー奨学金になっていると思う。僕の知り合いで数年後に留学しそうな人がいることもあり、継続的な支援が続くことを切に願っている。

さて、3月は2日間の学会にも参加してきた。“自然・社会システムにおける予測”に関する分野横断的な学会だ。予測に関わる分野で集まった人たちは、感染症疫学、地震学、気象学(天気・降水量の予測)、洪水の予測、生物の種の分布の予測、人口の予測、経済システムの極端なイベントの予測(リーマンショック)などだ。使う統計的手法や予測性能の評価指標が似通っていたりと、違う分野ながら共通点があり面白かった。特に予測の分野に携わる人たちは皆、利害関係者とのコミュニケーションをどう行うかについて強い関心をもっていった。また、各分野から結構な大御所の人たちが集まっていてびっくりした。

今回の学会の個人的なハイライトは街中の夜中の光が渡り鳥に大きな危害を及ぼすことの発表だった。発表中は渡り鳥の渡りのタイミングを、気温や明るさなどを用いて予測し、どのタイミングで街中の明かりを消すべきかを低減していた。リアルタイムでの予測がそこそこの精度で可能になっているため、次に出てくる議論としては、実際にどれほど街を消灯させられるか、という点だった。生物保護の観点と経済的活動で衝突が起きる点は、感染症対策と似ており、意思決定、政策のプロセス、経済評価が絡んでくる事案になりそうだ。

これらの予測を行う分野で、感染症疫学は他と違う点がある。それは予測対象の未来を短期的に人間側の介入によって変えられる点だ。例えば地震学や気象学では、数年以内に大地震が起きます、1週間後に過去最大のハリケーンが来ますと言っても、大地震やハリケーン自体を無くすことは難しい。つまり、予測対象自体は自然現象であり、それ自体は人間から大きな介入が出来ない。もちろん地球温暖化は人間の活動によって引き起こされているがここでいう予測は数日から数ヶ月の話だ。一方で、感染症疫学の分野では、感染者が増加してきたら行政からの呼び掛けやロックダウン、ワクチン政策を行うことで、感染者の推移変えることが出来る。つまり、予測対象の感染者数が今後の人間の行動で大きく変化する。感染症の予測が難しいのはここに一因がある。感染者数を予測しようと思ったら、人間の活動までも予測しなければ正確な感染者数の予測にはたどり着けないということだ。